

〈研究ノート〉

中国人日本語学習者による促音の 知覚判断方略について

孫 荃 麟

キーワード：持続時間、音節間の長短バランス、母方言の影響、拍の相対性と絶対性

1. 研究目的と方法

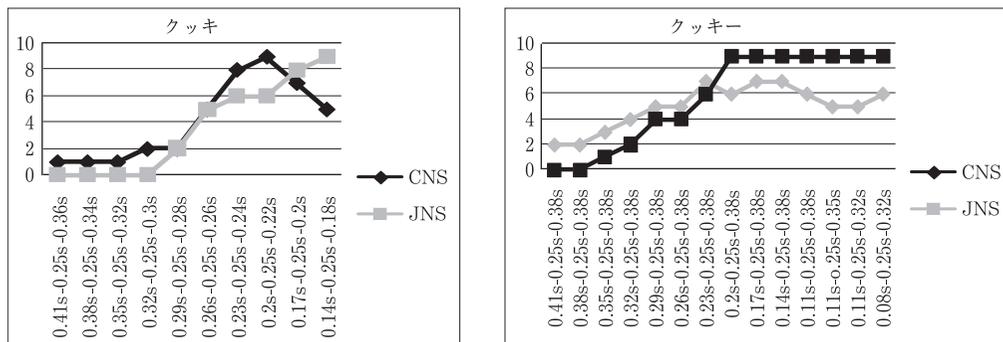
第二言語習得において、母語干渉がもっとも顕著に現れる分野が音声音韻であり、特殊拍の習得にも母語の影響が大きいと言われている。また、戸田(2003)によると特殊拍はモーラ性が付与され、アクセント核を担わないため、様々な異音を持つなどの理由で、自立拍に比べ複雑である。このため、第二言語学習者のみならず、日本語を母語とする幼児にとっても難しいと述べている。

そこで、本研究では特殊拍(促音)について、時間感覚という視点から、日本語母語話者(以下、JNS)の促音の知覚判断の方略を明らかにした上で、それと比較しながら中国人日本語学習者(以下、CNS)がどのような方法を使って、特殊拍の促音を知覚しているかについて調査した。

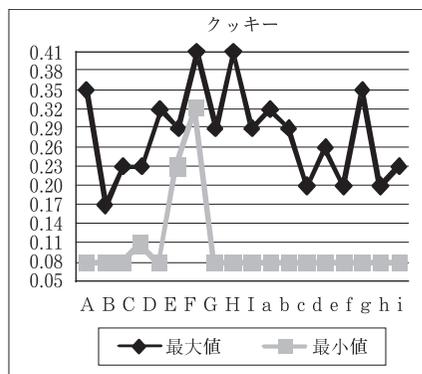
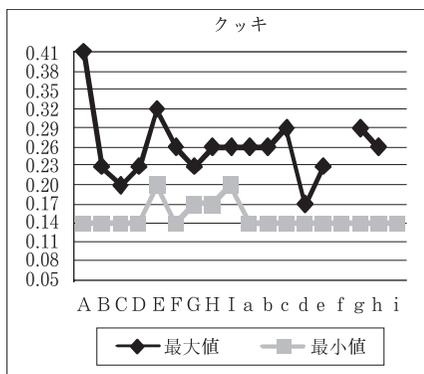
今回の研究では、モーラの音節だけを、また音素的音節だけを使うのではなく、両方とも用いて、新たなまとまりをひとつの区切り単位とする。たとえば、今回取り上げたクッキーの場合、「ク」、「ッ」、「キー」の三つのまとまりとする。つまり、CV、Q、CVRそれぞれをひとつの単位とするということであった。また、研究方法は三段階あり、(1)JNS 7名に対して、発話調査を行い、それをもとに(2)刺激音を作成した上で、(3)JNSとCNSの大学生各9名に対して、知覚調査を行った。

2. 研究結果

方法(3)の知覚調査の結果、母語別にまとめた持続時間人数分布とJNSとCNSの各人知覚範囲分



布二つの側面から結果を分析、考察した。人数分布図の縦軸は人数を表し、横軸は持続時間を表す。知覚範囲分布図（縦軸は第1音節の持続時間）を表す。横軸は対象者を表す（A～IはCNS, a～iはJNS）。さらに、標本範囲を参照しながら、分析を行った。



- ① JNSの促音の知覚判断の方略を明らかになり、促音が入っている3音節語(CVQCV)を知覚する時、閉鎖時間が促音の構成を満たす十分な閉鎖時間であれば、促音だと判断した上、促音および促音先行のCVと促音後継のCVの持続時間の長短バランスで、知覚を行っていると考えられる。促音と長音二つともが入っている4音節の語(CVQCVR)を知覚するときも同様に、各音の持続時間の長短バランスで知覚を行っているということがわかった。
- ② JNSが思っている1拍の長さは相対的な性質と絶対的な性質を持つとわかった。
- ③ CNSの促音の知覚判断の方略をJNSの結果と比較したところ、まずCNSは日本語学習歴に関わらず、1拍として成立するかどうかを判断の前提として1拍の長さで判断しているのだが、自分が思っている1拍の長さの境界値はJNSが持っている1拍の絶対的長さの境界値と異なっている。そのため、1拍を長くしたり、短くしたりする傾向がある。そして、朝鮮族であるCNSと上海出身のCNSが使っている方法については、JNSと同様の方法を使っている可能性があるが、それを確かめるためには、朝鮮族と上海出身のCNSに対して、縦断研究を行う必要がある。
- ④ 日本語の学習時間が長くなれば、なるほど、学習者の1拍の長さの境界値はJNSが持っている1拍の絶対的長さの境界値に近づいていくことがわかった。
- ⑤ 母方言からの影響については、朝鮮族と上海出身以外のCNSが負の影響を受けている。また香港出身のCNSが同じ学習時間の違う出身地の学習者と比べ、母方言からの影響が大きいとわかった。しかしながら、この特徴が普遍的なのか、特殊的なのかを明らかにするためには、もっと多くのCNSに対して、出身地別の調査を行う必要がある。

参考文献

- 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7巻2号, 日本音声学会, pp. 70-83
 戸田貴子(2008)「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』第2章, くろしお出版, pp. 23-41